会員研究

くじ引き将軍　足利義教

熊川　誠

室町幕府の六代将軍足利義教は、くじ引き将軍と呼ばれているが、また第六天魔王とも呼ばれていた。義教は、義満の子として生まれたが、兄義持が四代将軍となっていて幼年で青蓮院に入室し、得度して門跡となり義円と名乗った。

１８歳で、天台宗の大僧正、２６歳で天台座主になる俊才でした。しかし、僧籍であるため将軍後継者にはなれない運命であった。

四代将軍義持の時、上杉禅秀の乱が起こる。この乱は、前関東管領の禅秀が、鎌倉公方の足利持氏に対して反乱を起こした。要因は、持氏と対立した禅秀が関東管領を更迭され、一時反乱軍は、鎌倉を制圧した。持氏からの援軍要請に将軍義持が諸大名を招集し援軍を派遣。反乱は鎮圧されたが、その後、義持と持氏が対立し、幕府と鎌倉公方の対立が続く。一種の関東独立国の象徴が鎌倉公方と見える。義持の晩年は、息子の五代将軍義量が１９歳で急死するが、直系の子孫がなく、将軍不在で、そのまま、幕政を行った。義持も病を得るが、危篤に陥っても後継者の指名を拒否した。群臣たちの評議の結果、石清水八幡宮で籤引きを行い、義持の弟４人から選ぶことになった。この籤引きには、裏があり通説では、僧籍であった義円が、還俗していきなり将軍はまずいので、源氏の氏神である石清水八幡宮の神意を得ての選ばれた将軍であると位置づけしたものと思われる。つまり籤には、義円が当たる仕組みになっていた。また籤を引いた僧満済は、この功績で破格の栄達を受けています。将軍就任を果たした義教の目標は、兄義持の長い治世のうちに失墜した幕府の権威と将軍親政の復活であった。

その施策には、勘合貿易の復活、自分が参加者を選ぶ「御前沙汰」を事実上の最高評議機関とする。諸大名に意見を求めるときに管領を無視するなどがあった。また目障りな勢力の排除、または圧力を加えました。

「比叡山延暦寺との抗争」　延暦寺門徒は、幕府山門奉行の不正があったとして弾劾訴訟を起こし勝訴となったが、訴訟に同調しなかった園城寺を焼き討ちする。義教は激怒し延暦寺を攻撃。延暦寺は降伏した。しかし延暦寺が鎌倉公方持氏と共謀し、義教を呪詛している噂がながれた。また激怒した義教は、門前町の坂本を焼き討ちして大騒動となり、再び延暦寺が降伏した。後世の織田信長の比叡山の焼き討ちとやや似ています。

「永享の乱」鎌倉公方の持氏は、義持没後には、将軍になれると思っていたが、義教が六代目となり、彼を還俗将軍とよび蔑み、かつ恨んでいた。幕府との対立が多々あり、関東管領の上杉憲実が持氏を諫めていたが、逆に疎まれ身の危険を感じて領国の上野に逃亡。持氏が憲実を討伐するため挙兵したのを好機ととらえ、関東の大名に持氏包囲網を結成させた。また持氏を朝敵と認定し攻撃した。持氏は大敗し、剃髪をしたうえ恭順を示した。しかし、義教は許さず、持氏一族を殺害した。

「結城合戦」逃亡していた持氏の遺児の春王丸・安王丸兄弟が結城氏朝に担がれて反乱を起こした。義教は上杉憲実に討伐を命ずるも、関東諸将の抵抗にあい、力攻めから兵糧攻めに切り替え、約一年かかって鎮圧した。また、春王・安王丸は、京への護送中に殺害された。

これらの事変より、足利幕府の権威が回復されたが、義教は、魔将軍と恐れられた。義教は、猜疑心が強く、残忍であったと言われています。それを言い表す言葉に「万人恐怖、言うなかれ、言うなかれ」があります。

「嘉吉の乱」永享９年頃から赤松満祐が将軍に討たれるとの噂が流れていた。永享１２年、義教は満祐の弟赤松義雅の所領を没収して、義教が重用する赤松氏分家の赤松貞村に与えた。嘉吉元年、満祐の子赤松教康は「カモの子が沢山生まれた」ことと、結城合戦の慰労ということで、義教の「御成」を招請した。

義教は大名や公家を伴って赤松邸に出かけ、猿楽を鑑賞していた。突如、屋敷に馬が放たれ門が一斉に閉じられ、甲冑を着た武者たちが宴に乱入。この時、義教享年48歳。同行者も多く殺害された。

将軍が殺害された混乱状況から、諸大名も疑心暗鬼で、赤松満祐親子は、討手もなく、領国播磨に帰国できた。義教の葬儀後、追討軍が派遣され、約2か月で、満祐親子は死亡し、赤松氏嫡流家は滅亡した。

後世の織田信長と足利義教に類似点があります。この類似点を以下述べますが、それが意味があるかは不明です。ただの趣向です。

「比叡山の焼き討ち」両者とも焼き討ちをしていますが、義教のほうは、門前町の焼き討ちで、信長の徹底した破壊とくらべて差があります。

「反逆者のイニシャル」義教を殺害した首謀者は、赤松満祐で、織田信長の殺害は、明智光秀であり、イニシャルはA.Mです。

「恐怖政治」二人とも家臣に恐れられ、家臣もいつ厳しい処分があるか不安定な状態であったと推測されます。

「所領の没収」赤松満祐が所領を没収されかけていたことと、同じように明智光秀も丹波の国を没収して山陰の諸国を切り取り次第といわれていたとの説があります。

「殺害のされ方・謀反の形態」義教は、赤松邸に招待され、無防備であった。信長も畿内には抵抗勢力もなく、本能寺は無防備であった。どちらも謀反を想定していないで、まさに油断していたと推定します。

「殺された場所」義教の殺害現場は、赤松邸で現在の京都市中京区の西洞院あたりで、信長の襲われた本能寺は、京都市中京区堀川で西洞院に近い場所です。

「享年48と49」足利義教の享年は48歳で、信長は49歳でどちらも人生50年を前にして、死亡しています。

「人物像」義教と信長は、どちらも神経質で声が甲高かったとの説があるが、さだかでありません。以上、適当に類似点を探して述べましたが、主君としては、両人とも部下たちに恐怖心を与えていた。社会の安定化の為に役目終了で、歴史上から消え去ったと思われます。